

生化学若い研究者の会「第55回生命科学夏の学校」開催報告

浅川 賢史¹, 中川 香澄²

(¹生命科学夏の学校実行委員長 東京農工大学, ²事務局長 徳島大学)

「生化学若い研究者の会」は、日本生化学会後援のもと、全国の生命科学の研究に関わる若手研究者で構成されています。北海道から九州までの八つの地域でシンポジウムやセミナー等を開催する「支部活動」、ライフサイエンス誌へのコラム連載などのアウトリーチ活動を行う「キューベット委員会」、そして年に一度の滞在型研究交流会である「生命科学夏の学校」の三つの活動を行っています。

8月28日～31日の4日間、今年で55回目となる生命科学夏の学校を、千葉県のサンシャイン・白子にて行いました。全国各地から124名の参加があり、学部生からポストドクター以上の研究者まで、幅広い年齢層が集まりました。

夏がくる。学び、語り、未来を考えよう

第55回の開催テーマは「夏が来る。学び、語り、未来を考えよう」としました。生命科学夏の学校は、多様な研究分野や環境から研究者が集まるまたとない機会です。普段の研究生活では得られない、人との出会いや繋がりがたくさんあります。その出会いの中で、未来に向かって一歩踏み出すためのキッカケを見つけてほしい。そして、夏の学校の後も続く強い繋がりを作ってほしい。という願いを開催テーマに込めました。これを実現すべく、二つのシンポジウムと九つのワークショップ、三つの研究交流企画を行いました。

シンポジウム

現在、大学教育に関わる政策として「リーディング大学院」や「スーパーグローバル大学創成支援事業」が進められています。そこで、我々若手研究者に求められている力は何かを考えるため、「なぜ今リーダーシップが必要とされるのか」と「科学技術界のグローバル化とは何か」という二つの議題を掲げてシンポジウムを行いました。産・官・学から立場の異なる先生をお呼びし、そこに参加者も加わって白熱した議論が展開されました。近年、自然科学の研究分野は細分化が進んでいます。これから必要とされるのは、細分化した分野や国（ローカル）の垣根を越えて、研究者同士をグローバルに繋げることができる人材である。そして、そのような人を「グローバルリーダー」と呼ぶ、というお話が印象的でした。世界中の異なる研究者と協力しながら研究を進めていくために、いっそうコミュ

ニケーション能力やリーダーシップスキルが必要になってくると感じました。



ワークショップ

ワークショップでは、9名の先生方からお話を伺いました。専門的なお話はもちろん、先生方が歩まれてきたキャリアや研究姿勢についてもご講演いただきました。オープンサイエンスやキャリアパス選択といった日頃の研究活動に関わりの深い話題から、「バイオメディアアート」や「文化としての生命科学」といった独自の視点で語っていただく講演まで、多様性と専門性に富んだワークショップが行われました。講演終了後も講師のもとに多くの参加者が集まり質問している様子も見られ、たいへん有意義な時間となりました。



研究交流企画

先生からお話を聞くだけでなく、若手研究者同士の交流を深める「研究交流企画」も夏の学校の魅力です。初日は、自分の研究を紹介し合う「研究交流会」を行いました。緊張している参加者の姿も見受けられましたが、すぐに打ち解け、互いの研究内容や興味のある分野について白熱した議論が展開されました。加えて、より踏み込んだ意見交換をするために、「ポスターセッション」も行いました。本学校は多様な研究分野の研究者が集まります。分野の異なる方にも自分の研究を理解してもらうために、伝え方に工夫を凝らした研究発表ポスターが揃いました。最終日の「自由集会」では、参加者が日頃気になっているトピックをトークテーマにし、班に分かれて討論と交流を行いました。研究室では話せないような悩みを相談したり、夢を語り合ったりすることで、参加者同士の繋がりも深まったようでした。



夏の学校が終わってからも続く繋がり

今回の夏の学校では、参加者同士の「繋がり」だけではなく、上述の生化学若い研究者の会の三つの活動の「繋がり」を意識しました。日頃から行っている支部活動やキュベット委員会の活動を紹介する場を例年より多く設けたところ、それらの活動にも参加してみたいという声が多く寄せられました。自分が住む地域以外の支部のセミナーに足を運び、夏の学校が終わってからも参加者が交流を続ける様子も見られています。今後、生化学若い研究者の会の活動の連携をさらに強化し、ますます生命科学研究を盛り上げていければと思っています。

今回の夏の学校を通して、未来の研究に繋がるたくさんのキッカケや、夏の学校以降も続く人と人との繋がりを提供できたと考えております。来年の夏の学校は「あなたの夢は何ですか」をテーマに掲げ、既に準備を始めています。日頃の支部活動やキュベット委員会（ローカル）で若手研究者一人一人が切磋琢磨し、来年の夏の学校（グローバル）では今回以上に活発な議論が行われることを期待いたします。

最後に本年度の夏の学校を開催するにあたり、ご協力いただきました講演者の皆様、そして多大なご支援をいただきました日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆様にご心より御礼申し上げます。

（生化学若い研究者の会・第55回生命科学夏の学校についてはこちら：<http://www.seikawakate.org>）

